

雪国・越後湯沢

海と山の島国・日本にあって、関東平野の広さには改めて驚きを感じた。海と山に挟まれた故郷・神戸と比較すれば想像を絶する規模である。それは初めて乗車した上越新幹線でのことであった。東京駅から新潟県越後湯沢駅に向かう途中、行けども行けども車窓からの景色は、町と田畑を交互に見るだけの単純な繰り返しであった。しかしよいよ関東平野が終わると、大きな山脈にぶち当たり何度かトンネルをくぐるとそこは雪国であった。

越後湯沢で下車した。3月の下旬ではあったが駅周辺から見える山々はたつぷりと雪を被っていた。目を下にやると家々の屋根にも雪が残っており、道路脇には高く雪が積まれていた。ここでしばらく佇



んでいると、まるで川端康成の長編小説「雪国」の世界に迷い込んだような錯覚を覚えた。川端は1935（昭和10）年に「文藝春秋」「改造」などに分載するまで、この湯沢町を舞台に逗留しながら執筆にあたっている。主人公・島村と2人の女性、駒子と葉子の人間関係を描く中で、情景や心情の日本的な美の世界が高く評価された作品となっている。

この地域は11月後半から4月までの約5か月にわたり雪の生活を余儀なくされている。雪国に暮らす人たちは雪があることで時に生活が「不便」なことはあるにせよ、それが即「不幸」ということではない。助け合いの心、思いやりの心、辛抱強さ等がこの地特有の気質となり人の心に根差している。雪がもたらす素晴らしい人間ドラマがある。 撮影 2013年春

